

「知育・徳育・体育」という言葉がある。「知徳体」ともいう。学校の教育目標などは、この3つの要素からできていることが多い。

本来、知徳体のバランスが重要なのであるが、どうも知育と体育に重きが置かれ、徳育が軽視されてきたきらいがある。学力向上、体力向上と声高に言われてきた。学力は、テストや学力調査等で数値化され見えやすい。体力も体力診断テストや大会等の結果から成果が見えやすい。

また、教育の現場にも人事評価の波が押し寄せ、数値目標が必要とされるようになったことも大きい。学力や体力は数字で考えることができる。数値化されると評価もしやすい。ただし、数値目標が“ノルマ”のようになってしまう危険性もある。そうなると、様々な問題が起こることが予想される。

目標達成が給与に反映するとしたら、目標達成のために必死でがんばろうとする人、数字合わせに動く人、最初からやる気をなくして給与カット等を受け入れる人の3つに分かれるかもしれない。3つの選択肢に追い込む、強いプレッシャーをかけ、数字を動機にして働かせようとすること自体が、働く人の心や組織をおかしくすることにつながる。

一方、思いやりや真心、心の豊かさなどは数値化しにくく、見えにくい。それでも、近年は道徳教育の重要性が叫ばれ、道徳の時間も教科化された。この施策の成果がわかるのは、これから先、かなり後となる。

この前、ある人、教育関係者ではない方から、「教育には何が一番大切なのか」と聞かれた。私は「徳」と答えた。その方は、最初は「得」のほうだと思ったらしい。教育が得を追い求めるようになってはいけない。

自分が、このところ人間性や哲学、人間学に類する書籍を読んでいる影響もある。梁川高校に勤務するようになり、生徒が社会に出るまでに、一定の学力や体力をつけてあげることが使命であると考えている。その一方で、「徳」はもっと大切なのではないかと思うようになった。

教育の目的は、「人格の完成」である。人格の陶冶である。陶冶とは、「人の性質や能力を円満に育て上げること。育成。」と辞書にはある。人を育てる際に、知徳体どれも必要ではあるが、徳を軽視してはいけない。世の中には、知に優れた人、高い身体能力をもっている人がたくさんおり、メディア等にも登場している。しかし、徳が欠落しているとしか思えない方がいるのも事実だろう。

徳に関しては、学校教育だけで育成するものではない。家庭の力も地域の力も必要である。だが、学校が担う比重が増えているのが現状であろう。徳は、知や体に比べて明確な指導法があるわけではないように思われるが、実は、我々日本人が昔から大切にし、行ってきたことに、その答えがある。数字にできないもの、見えないものほど大切なことを私たちは知っているはずである。本校の教育は、徳を土台として知と体を育成している。